

〈地域調査報告〉

伝統行事が培う防災意識

—気仙沼市唐桑町における東日本大震災後のウラバライを事例として—

尾形幸輝, 加藤亜里紗, 木村麻亜子, 平田翔也

教養学部地域構想学科3年

はじめに

現代社会では伝統行事や祭礼に対する理解が薄れつつある。たとえば、近年都市部や山間部を問わずに広がる伝統行事の担い手不足などはそれを示す一例として挙げられるだろう。

しかし、それでもなお今まで継承されてきた伝統行事には、それぞれ始まりにも理由があり、現在まで継続されていることにも何らかの必然性があると考えられる。したがって、改めて地域の伝統行事を見つめ直すことで、自分の住む地域についての理解を深めていくことが可能だといえる。なぜなら、地域についての理解を深めるということは、地域に愛着や誇りを持つ契機ともなり、地域コミュニティの活性化という点につながるものでもあるからだ。

調査地である宮城県の気仙沼市唐桑町ではウラバライという儀礼が行われている。浜との結びつきが深いこの地域に住む人々にとってこの祭礼は少なからず浜と暮らしを共にしている彼ら彼女らの生活を象徴しているものであると考える。本調査においては、なぜこのような儀礼が地域の中で行われているのか、もしくは行う必要があるのかを明らかにしていく。これを明らかにすることで伝統行事を見つめ直し、多様な生活世界の理解を深める有効性を考えていきたい。

I. 問題の所在

2011年3月11日午後2時46分に発生した三陸沖を震源とする東日本大震災は国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した。私たちが調査地と

した気仙沼市唐桑町も次節で詳述するが東日本大震災によって甚大な被害を被った。本調査地は、日ごろから海の近くに住み、漁業や養殖業、水産加工業などに頼りながら生活をしている住民が多く、津波などの自然災害と隣り合わせの環境で生活してきた地域であるといえる。現に唐桑では、過去にも1896年の明治三陸地震や1933年の昭和三陸地震、1960年および2010年のチリ地震による津波など度々津波の被害を被っていた(表1)。唐桑町内には以前襲来した津波について「地震があったら津浪の用心」と伝える石碑が幾つも建てられていたり、津波を疑似体験することができる津波体験館などが存在したりすることからも、津波と隣り合わせの環境であることがうかがえる。

表1 三陸地方の主な津波史

	津波	規模(M)	死者数	流失家屋
869	貞観津波	8.3	1,000	
1611	慶長津波	8.1	2,963+3,000 (人馬)	
1677	延宝津波	8	12	6,060
1856	安政津波	8	29	
1896	明治三陸大津波	8.1	21,953	7,274
1933	昭和三陸大津波	8.1	3,064	6,067
1960	チリ地震津波			
2010	チリ地震津波			
2011	東日本大震災	9	18,776※ (含行方不明者)	130,430※ (全壊家屋)

※警察庁統計(2012.7.11現在)

また、唐桑に住む人々は漁業に携わる人が多く、海のそばでの仕事が多い。したがって津波に限らず船舶の海難事故もまた度々発生してきた。表2～4は貞観津波から昭和56年までの唐桑の主な海難事故である。

表2 唐桑の主な海難史（近世以前）

唐桑町海の殉職者慰霊碑保存会(2006)より作成(表3, 4も同じ)

元号	西暦	日付	被害
貞観11	869	0526	大津波被害
天正13	1585	0514	津波/被害不明
慶長16	1611	1028	大津波/仙台領内男女1783人溺死
元和02	1616	0728	津波/被害不明
慶安03	1650	2月	正兵衛ら7名の廻舟暴風風行方不明
慶安04	1651		津波/被害不明
延宝04	1676	10月	津波/被害不明
貞享04	1687	917	津波/被害不明
元禄02	1689		津波/被害不明
元禄09	1696	1101	津波/被害不明
享保02	1717		津波/被害不明
享保15	1730	0525	津波/被害不明
享保19	1734	0706	大暴風雨/牡鹿・本吉地方漁船十数艘が遭難/66名死亡
宝暦01	1751	0602	津波/被害不明
天明年間	1780年代		津波/被害不明
寛政年間	1790年代		津波/被害不明
文化02	1819	1119	大暴風雨/遭難船多数
天保07	1836	0625	津波/溺死者多数
天保08	1837	1011	津波/高潮被害のみ
弘化04	1847	0717	大暴風雨/古館の元船-小山の久次郎ら13名死亡・古館の新船-高石浜の孫七ら12名死亡・中村の新船-立石の新五郎ら6名死亡・丑畑の船-与三郎ら9名死亡・幸之助の船-白浜の作重郎ら8名死亡・中川原の船-水尻の又治ら7名死亡・小原木で45名死亡/気仙沼本吉地方の漁夫335名溺死
安政03	1856	0725	津波/溺死者多数
慶応02	1866	0314	大暴風雨/石浜・明戸・小田の3名溺死

調査の過程で、唐桑では津波や台風、暴風雨などによって海難事故があった際にウラバライという儀礼が行われてきたことを知った。これは第一に唐桑地区の特定の浜や浦を発って亡くなってしまった人に対する供養という意味を持つ。つまり唐桑近辺の海での事故に限らず、唐桑のあらゆる港から出港してその先で事故に遭ってしまい亡くなった人や、海で遭遇した水死体（「オホトケ」とよばれる）を連れ帰ったときも供養の対象となり、海で亡くなってしまった人を浜で供養する。

また唐桑では、そのような海難事故が起きた際、もしくは水死体を連れ帰るなどした浜は穢れた浜として考えられている。浜が穢れた状態であるということは、分かりやすく言えば浜が非日常の状態にあることを意味する。浜が穢れた状態のまま次の漁を行うことは不漁や事故など不吉なことが起こると考えられ、タブーとされてきた。そこで

表3 唐桑の主な海難史（明治～戦前）

元号	西暦	日付	被害
明治01	1868	0212	赤魚又ウケ漁の小鯖梨/木源四郎ら3名・長六郎父子2名遭難死亡
明治01	1868	6月	津波/被害不明
明治02	1869	0310	鯖立久作の子2名・福治郎の子ら4名時化で遭難死亡/米の木沢幸七ら13名死亡
明治03	1870	0218	長根長藏親子ら4名赤魚漁遭難死
明治03	1870	1219	長森馬吉ら4名遭難死亡
明治07	1874		橋浜千葉留之助ら遭難
明治14	1881	0310	北古館村上吉左衛門ら4名赤魚漁で時化のため遭難死亡
明治20	1887	0114	舞根島山吉助ら5名又ウケ漁遭難死
明治20	1887	3月	暴風雨小舟転覆多数
明治27	1894		津波/被害不明
明治29	1896	0625	三陸大津波/漁船500艘 死者845名
明治30	1897	0805	小規模津波
明治35	1836	0625	津波/溺死者多数
明治35	1902	0623	熊谷松右衛門所有 盛光丸塩蔵神社参拝の途中転覆5名死亡
明治43	1910	0811	台風で小型漁船多数沈没
明治45	1912	0923	台風で漁船被害多数
大正02	1913	0918	台風で押止浜 鯉船遭難16名死亡
大正02	1913	0921	松園 千葉倉吉ら3名遭難死
大正02	1913	1008	小鯖 伊藤勝四郎、松園千葉西松親子ら10名遭難死
大正03	1914		津本 中川原家春日丸釜石沖で座礁大破沈没 船長1名死亡
大正04	1915	0301	中井 大久保又ウケ船4名死亡
大正04	1915	0314	鯖立 中前1名死亡、宿 若林の船時化で転覆し4名死亡
大正04	1915	0404	松園 千葉勘右衛門ら4名遭難死、石浜 長角坊の船沈没6名死亡、舞根門の又ウケ船転覆6名死亡
大正04	1915	0517	舞根鯉船島山庄之助ら15名遭難死
大正10	1921	3月	暴風雨小舟転覆多数
大正12	1923	0317	松園 屋敷家 汽船衝突事故4名死亡
大正14	1925	1106	気仙沼 本家島屋第三宮崎丸モウカ丸漁 大時化沈没唐桑船員18名死亡
昭和05	1930	0905	中興丸 台風で13名死亡
昭和06	1931	0405	小原木 裁鉤 熊谷七十郎所有金比羅丸 暴風雨遭難 23名死亡
昭和08	1933	0303	三陸大津波 船417艘 死者60名
昭和08	1933	0408	春日丸遭難 唐桑船員2名死亡
昭和09	1934	1126	気仙沼福一丸 唐桑船員2名遭難死
昭和11	1936		高田丸遭難 唐桑船員1名死亡
昭和13	1938	1113	気仙沼大晴丸 金華山沖遭難沈没 唐桑船員34名死亡

※戦時中漁船は徴用された。唐桑の徴用船は19艘。徴用船沈没による戦死者150名。 ※戦後の唐桑海難史は船が全損の事故のみ

非日常の状態にある穢れた浜を清め、非日常の状態である浜を日常の状態に戻すために行う儀礼がウラバライである。

しかしウラバライをするまでの間、漁に出られないのは海の仕事を生業としている人の多いこの地区にとっては、生活を成り立たせていく上で大きな影響を及ぼす。それにも関わらず、このウラバライが数百年にわたって繰り返されてきたこと

表4 唐桑の主な海難史（戦後）

元号	西暦	日付	被害
昭和27	1952	0324	栄福丸15名行方不明
昭和27	1952	0712	気仙沼 第十一明神丸転覆10名死亡
昭和28	1953	1216	大雄丸
昭和30	1955	1226	第十二千代田丸 銚子沖18名死亡
昭和30	1955	1226	第七古峯丸 銚子沖13名死亡
昭和30	1955	1226	第六観音丸 銚子沖12名死亡
昭和31	1956	0226	気仙沼 第六明神丸 択捉沖転覆
昭和31	1956	0403	長福丸 銚子沖
昭和33	1958	1116	第一稲荷丸
昭和34	1959	0926	第五明神丸 大船渡赤崎 福島 座礁 26名死亡
昭和35	1960	0101	気仙沼 第十三弁天丸
昭和35	1960	0127	第六権栄丸 4名死亡
昭和35	1960	0722	第一千歳丸 7名死亡
昭和36	1961	0401	第二恵福丸 22名死亡
昭和36	1961	1223	第十雄島丸
昭和37	1962	0520	第十稲荷丸
昭和37	1962	1106	第三天洋丸
昭和38	1963	0124	第八明神丸
昭和38	1963	0329	第十五栄宝丸
昭和38	1963	1021	第二十大吉丸
昭和39	1964	0604	第八成徳丸 18名死亡
昭和40	1965	0109	大伸丸
昭和40	1965	0109	第八日興丸 野島沖東方 13名死亡
昭和40	1965	1126	第三稲荷丸 野島沖東方 13名死亡
昭和43	1968	0331	第八十六大栄丸 17名死亡
昭和44	1969	1002	大十八大忠丸 18名死亡
昭和47	1972	0609	第十海形丸 ハワイ沖火災20名死亡
昭和49	1974	1018	第十七春洋丸
昭和50	1975	1112	第八なか丸 歌津沖16名死亡
昭和53	1978	0905	第八十八陽豊丸 納沙布沖14名死亡
昭和55	1980	1007	第二十八富丸 13名死亡
昭和56	1981	0605	第三十三手扇丸 衝突9名死亡

には、浜が住民のくらしの生活の場として密接に関わっている場所だからである。なぜなら、浜を生活の場としている唐桑の方々にとって浜に対する思い入れは深く、生活を支える浜という場所を日常の状態に保つことは唐桑の人々に切実なことからである。

単純化を恐れずにいえば、①ウラバライには非日常の状態にある浜を日常の状態に戻し、そうして生業の場の穢れを清めること、②海難事故によって亡くなった人に対する供養という二つの意味が存在する。

しかしながら、私達はウラバライについての聞き取り調査を進めていくにつれてウラバライには以上の二つに加えてもう一つ、減災に関する意識

の向上と安全祈願という機能を果たしているのではないかと感じた。これは、先ほどの2つの意味とは異なり、意図せざる結果として作用するものであると考える。

私たちは通常、災害の際の危機管理として避難訓練を遂行することで防災に役立つ危機意識を無意識のうちに植え付け、いざというときに喚起させる装置としている。唐桑ではウラバライという儀礼がそれを担っており、通常の避難訓練とはまったく異質なあり方で継承されていると考えた。

海のそばに暮らしていても、唐桑に住む人々にとって、浜という時として危険な場所へと変化する土地に対する心理的な距離が遠ければ遠いほど危機意識は低く、いざ災害が起きた時の対応は遅れる。しかし心理的な距離が近いほど改めて海の危険さを知り、減災の向上につながるのではないかと私たちは考えた。普段から、この地区の人々は危険と隣合わせの場所に住み続けている。伝統行事であるウラバライを絶えず行うことによって、いざ災害が起きた時にどう対応すればいいのか減災につながる術を身につけてきたのではないだろうか。

今回の過去最大クラスの震災によって、唐桑に限らず多くの場所で被害を受けた人がいる。この経験は確かに多くの場所で再び海の近くに住む危険性と減災意識を向上させるきっかけとなっているだろう。唐桑では以前からウラバライを通じて海が危険であることを見直す機会が多々あった。

なぜウラバライは、古くから唐桑で受け継がれ、同時に唐桑の人々に何を訴えかけてきたのだろうか。

私たちは、震災後も唐桑地区で行われ続けるウラバライ防災のための一つの役割を果たしているのではないかという仮説を検証するため、以下に論を展開していく。

Ⅱ. 唐桑町の概要

1. 唐桑町の位置・人口・産業

1) 唐桑町の位置と人口

「唐桑町は2006年3月31日に気仙沼市と合併して気仙沼市となった。それ以前は気仙沼市や岩手県陸前高田市と隣接する本吉郡唐桑町として漁業を主な生業にしてきた町である。

唐桑の属する気仙沼市は、宮城県の北東端に位置し、東は太平洋、南は宮城県本吉郡南三陸町、北は岩手県陸前高田市に接している。気仙沼市は、北上山系の支脈に囲まれ、西から東に向かって流れる大川や津谷川が太平洋に注いでいる。太平洋に面した沿岸域は、半島や複雑な入り江など、変化に富んだリアス式海岸を形成し、気仙沼湾は湾口に大島を抱く天然の良港となっている。平成19年より気仙沼市となった唐桑町は世界の三大漁場の一つに数えられる金華山沖を目前に擁している（気仙沼市役所HP）。現在の唐桑町には、1,033世帯、3263人（平成24年2月現在）が居住している。

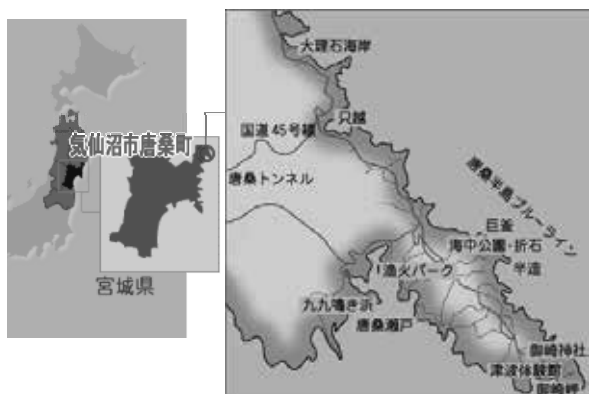


図1 唐桑町の位置

出典：本吉唐桑商工会HP

2) 唐桑町の産業

唐桑町は古くから漁業を基盤にしてきた町である。昔は遠洋漁業に力を入れ、現在でも漁業が産業の中心となっている。

今なお住民の半数は、漁業に直接的・間接的に携わっている。沿岸で始まった漁は時代とともに大型化し、沿岸から離れて次第に沖に向かうようになり現在では約1年をかけて出漁している。最

盛期には1,600人もの漁船員（当時町内全世帯の約七割）がマグロ船に乗り、現在でもその数は800名にのぼる。かつて遠洋マグロ漁が行われていたころは唐桑御殿（写真1）と呼ばれる大きな家屋が建てられ、唐桑の景観を形作っている。



写真1 唐桑御殿

出典：本吉唐桑商工会HP

現在では、遠洋で一年以上の航海をしながらマグロ等を獲る遠洋漁業、近海で行われるマグロ・メカジキ等を獲る近海小型漁船漁業、1トン未満の小型船での刺し網・カゴ漁、鮑・雲丹等を一番味の良い時期に限定した「開口」等の漁が行われている。

また、水質の良好な沿岸の海を利用した養殖もさかんで、牡蠣や帆立、ワカメ、ホヤ等を育てとる養殖漁業が行われており、海一面に養殖の筏が広がっている。

その他にも水産加工業や自然を生かした観光業が行われている。

2. 唐桑の浜にまつわる祭礼と儀礼

唐桑では様々な祭礼や儀礼が執り行われている。年間の行事の詳細については2章（表2）で触れるが、とりわけ浜にまつわる祭礼として「神幸祭」とウラボライに触れておく。「神幸祭」は「権現サマ」と親しみをこめて呼ばれるが、航海安全と豊漁を祈願するのが目的で、毎年10月の第1日曜日に執り行われる。神輿渡御、船祭り、宿打囃子、稚児行列、道中手踊りなどがその内容である。神輿渡御は神馬と共に町内を回って、早馬山の麓で祈祷を行った後、宿浦港へ下る。その後、漁船に神輿を積み十数艘の漁船をお供させ洋上へと進

む。途中、鮪立港、小鯖港に寄り大漁祈願祭を行った後、唐桑半島の先、御崎沖にて祈祷を行い、全ての漁船が輪を描きながら時計周りに3周する。3周した後、競うように全速力で宿浦港へ帰ってきて禊を行う。

境内では宿打囃子獅子舞保存会による奉納太鼓、奉納演芸、早馬神社道中手踊り、若草幼稚園の園児による稚児行列、解禁されたばかりの新鮮な牡蠣・帆立の試食・即売会などが行われる。

対して本報告が取り上げるウラバライであるが、既述したように、数百年も前から続くと伝えられる海難事故者や津波被害者の遺体が打ち上がった浜を清めるために行われている儀礼である。浜が穢れたままの状態で船が漁に出ると不漁や連なる事故など不吉なことが起こるとされている。そのため、その浜を発った船が事故に遭って命をおとした場合、あるいは遺体を連れ帰った場合、あるいはその浜で遺体が見つかった場合、御施餓鬼供養を行い、その後にウラバライを行う。ウラバライは寺（地福寺）による御施餓鬼供養から神社によるウラバライまでの流れの一部で、主に各浜の青年会が中心となって行われている。ウラバライについては次章以降で詳述する。

また、唐桑は深い信仰心を培ってきた町で、唐桑の人々は突然に襲う天変地異や事故から家族を守るためにいつも祈ってきた。その中の一つである神仏講の「神様アソバセ」と「オハダシ」は、部落内の一年間の幸せを願って行われる行事である。年の初めに家々の代表者の女性が集って地区内の神社と寺をお参りする。唐桑地区の中に含まれる宿地区では、毎年総勢20～30人で近くにある諏訪神社、熊野神社をまわり、早馬神社と地福寺でご祈祷を受ける。かつてはオガミサマといわれる巫女に一年を占ってもらってもいた。オガミサマとは、口寄せを行う巫女のこと、大漁祈願や航海安全などの祈祷を引き受けるとともに、海での失せものや行方不明者を探す役割も担ってきた。

一年を無事に過ごす、年の終わりに再びみんな

で集まり、神様に感謝してお参りをするという「オハダシ（御果たし）」を行う。唐桑の暮らしのなかで繰り返されてきた伝統行事である。

3. 東日本大震災での被害状況

気仙沼市全体で死者数1,032人（身元不明者数69人）、行方不明者数308人（2012年3月29日現在）、住宅被災棟数15,590棟（2012年2月29日現在）、被災世帯数9,500世帯（2011年4月27日現在・推計）と非常に大きな被害を受けた。旧唐桑町の範囲では105名の尊い命が失われている。

また、牡蠣の養殖施設約550基のほぼ全てが全壊・流出したほか、漁船や養殖施設が流されてしまったり、陸に打ち上げられてしまったりと壊滅的な被害を受けた。

唐桑では、漁の再開や養殖施設の復旧など少しずつ復興に向かっているものの、唐桑地区全体で311戸、282世帯、844人（2011年9月22日現在、引用：唐桑半島最新被災情報）が仮設住宅での生活を余儀なくされている。また、唐桑町の中でも被害の大小があり、今後解散を選ぶ地区もあれば集団移転に向けて協議を進める地区も存在し、復興にむけての方向性も一様ではない。

次章では震災時、唐桑においてどのような慰霊行事が行われたのかについて、フィールドワークで得られたデータから明らかにしていきたい。

Ⅲ. 3・11津波と唐桑

1. 震災時の対応

ここではまず、震災発生時からその数日の間、唐桑町の人々が、各地区でどのような対応をとっていたのかをふまえておく。更に、唐桑の人々が被災以後、具体的にどのような状況におかれていたのかを把握するため唐桑町宿地区に住む二人の女性と一人の男性、三名の被災経験を詳細に辿っていくことにする。

1) 地区としての対応

唐桑でも気仙沼市役所唐桑支所の位置する宿地区での地区としての震災時の対応としては、指定

避難所となっていた唐桑町役場の裏に位置する体育館で、炊き出しを行ったことがあげられる。震災から4月までの間、宿地区で被害の小さかった1区と3区の人々がローテーションを組み、炊き出し活動を行った。津波で家が流されてしまい、避難所で生活している人々や、地区の消防団におにぎりなどを振舞ったのである。炊き出しには水や米、野菜などの食材が必要であったが、炊き出しを行っていたメンバー各々が持ち寄ったものを使っていた。陸に打ち上げられた船から漁のエサ用のサバやイカが調達されたこともあった。捜査や瓦礫の撤去が滞りなく行われるように、唐桑の人々は出し惜しみなく材料を提供し続けたという。なかでも「フードセンターからくわ」や近隣のコンビニエンスストアは浸水しながらも無償で食材を提供してくれたという。

2) 住民の被災経験

①梶原タエコさん

唐桑町出身で、8人兄弟の6番目に生まれる。この地区では二度のチリ地震津波、今回の東日本大震災による津波の3つの津波を経験している。唐桑半島に知れ渡った桶職人の父を持ち、幼い頃から父の手伝いであちこちの家を訪ねていたことから地区には詳しく、17歳のときから45年間唐桑町役場に勤めていた。

震災時は姉と一緒におり、位牌と財布を握りしめた姉の手を引いて逃げた。唐桑消防署から津波警報を聞き、唐桑町役場が避難所となっていることを知ったが、そこよりもさらに高台に位置している福祉施設である“高松園”まで避難した。一緒に逃げていた姉は、足が不自由であったために、タエコさんは姉を引っ張りながら必死で逃げていた。片足を津波に掬われ、そのときに見た津波の様子を「大蛇の頭のような感じだった。」と話してくれた。震災から約1か月の間は電気も水も出なかったが、野菜は自家栽培しており、“ストッカー”という冷凍庫には大量の海産物が保存してあったため、食料には困らなかった。「唐桑にはどの家にもストッカーがあるので、魚に困ることはないんじゃないかな」という。

ないかな」という。

また地区の女性会の部長という役職を任されていたこともあり、震災時は先の炊き出し活動においても中心的存在となり多いときには1日に300個ものおにぎりを地区の女性たちと作った。

②鈴木正人さん

震災時は、レンタルしてきた高所作業車に乗り、自宅の桜の木の手入れ作業を行っている最中であった。最初は、強風に煽られて揺れているのかと思ったが、下から家族が「降りてこい」と叫ぶ声を聞いて、梯子を使って降り、その場で揺れが収まるのを待っていた。本家が海辺にあり、漁業関係の仕事に携っていたので、網や浮といった仕事で使う道具は、浜辺に置いてあるのだった。地震が来ると、津波が到達する前に必ず浜へ行っって道具を家の中に持ってくるのが習慣であった鈴木さんは、今回も同様に、揺れが収まってから本家の方へ車で向かった。車を高台に停めて、浜の方へ降りようとしたが、そのとき既に、津波はすぐそこまで来てしまっていたので、仕事道具を移動させることは諦めざるを得なかったという。

震災から約1か月の間は自宅は無事であったため、そのまま住み続けることができた。津波で家を失った親戚の一家3人が避難してきたので、しばらく一緒に過ごした。震災から一週間の間はほとんど外出せず、自宅で過ごしていた。しかし、役場にへりで救援物資が届いたときには、その仕分け作業を手伝ったりしていた。

鈴木さん宅は、ガスはプロパンであったために使うことができた。しかし、電気と水道が止まってしまっていたため、唯一の灯りは蠟燭であった。水は知りあいから分けてもらい、蠟燭も近くの葬祭屋が配ってくれたので、数には困らなかった。また、灯油式のストーブを使っていたのだが、当時大量に灯油を買い置きしていたことが功を奏し、暖を取ることに困らなかった。しかし、唐桑町内に4箇所あるガソリンスタンドのうち、3つが津波に吞まれてしまった。残りの一つは緊急車両用に充てられたため、一般の車両は給油が出来

なかった。したがって、車で移動することは困難であった。

一週間ほど経つと、鈴木さんは元々役場で水道管理の仕事をしていたため、水道の修復作業にたずさわった。「唐桑のためにできることはなんでもしたい」と思っていた。その努力の甲斐あって、震災から20日ほどで唐桑の水道が回復した。電気
の復旧には一カ月ほどを要した。

③鈴木啓子さん

そろばん塾を経営していた鈴木さんは、地震で避難するときには、絶対に車を使ってはならないという考えを持っていた。放送で大津波が来るということを知った鈴木さんは、半身麻痺を患っている夫を連れ出さなければと一旦自宅へ戻り、ヘルパーさんとともに夫を車椅子に乗せ、高台まで避難し、そこで津波を目の当たりにした。自宅は、津波に吞まれてしまった。

避難生活中は夫が半身麻痺であることから、通常の避難所では困難が多すぎると判断したため、指定避難所となっていた公民館へは行かずに、福祉施設である「土筆の里」へ避難することにした。そこで2ヶ月の間、避難所生活を送った。その間一番困ったことは、夫の薬が手に入らなかったことであった。

救援物資は、世界各国から届けられていた。大変ありがたいことだったのは間違いない。しかし海外の缶詰などを見ると、やはりどうしても食べることに抵抗を感じてしまい、誰かにあげてしまった。これだけ大変な状況であるにもかかわらず、どうにかなるのではないかという考えが心のどこかにあり、本当に追い詰められた心境ではなかった。もしも本当に追い詰められた状況であったならば、そんな贅沢を言っている余裕はないはずだからである。

また、被災者という立場からみると、福祉施設で働いているスタッフの方々には、とてもありがたいと思っている反面、自分は健康体であるにもかかわらず、助けってもらってばかりであるということに申し訳なさも感じていた。そのことがスト

レスになることもあった。

このようにかつて経験したことのなかった規模の大震災により、唐桑にはこれまでの経験では決して味わったことのない“非常時”が訪れた。唐桑沿岸部では、押し寄せた大津波によって多くの人が家を流され、なかには家族が流された人もいた。普段は町民の文化祭などの会場となっていた体育館は、一時遺体安置所となった。水や食料の調達も困難であった。水は井戸から汲み上げたものを用いた。食料は自宅に備蓄しておいたものや、救援物資、先に述べた「からくわフードセンター」からの配給に頼るほかなかった。このように唐桑の沿岸部は混沌のなかにあり、人々は、これまでにないような悲痛な思いをした。では震災によって犠牲となってしまった人に対して唐桑の人々はどのような慰霊行事を行っていたのだろうか。

2. 震災による慰霊行事

今回の東日本大震災による大津波での犠牲者または行方不明者は、宿地区での6名をはじめ、唐桑町全体では、105名にのぼった。それに伴い、震災から3ヶ月あまりが経った2011年6月11日、宿地区の地福寺において「御施餓鬼法要」、つづいて北小館浜でウラバライが行われた。これは震災から百箇日が過ぎたことを契機として、今回の震災での犠牲者を悼むために執り行なわれた。しかし同時にこの行事では、明治三陸大津波と昭和三陸大津波での犠牲者、海難事故の殉難者、海で命をおとした戦死者の霊もまた慰められている。このウラバライとはいったいどのような儀礼なのだろうか。

3. ウラバライとは

唐桑地区は元々、漁業が盛んな地域であった。住民のほとんどは、自立して漁業にたずさわるために、唐桑の大多数の若者が、地元の水産高校に通っていた。男性は、船乗りになるために漁業科や製造科に、女性は缶詰などを作る加工科に、それぞれ進学した。そして皆、卒業後は一人前に漁

業や養殖、海産物加工業をこなすのであった。当時この地区では、漁師たちは“漁師様様”と称えられていた。それは、漁師たちはみな裕福であったからである。唐桑には「唐桑御殿」と呼ばれる御屋敷のような大きな家が多数存在するが、これらは裕福な漁師たちの間でも、特に裕福な船頭などの“お偉いさんたち”によって建てられたものである。そんな唐桑の漁業は、二百海里問題や地元住民の漁師離れが進んできたことで、近海漁業や養殖業に切り替わってきた。しかし当時は、マグロやメカジキ、北洋サケマスなどの遠洋漁業に携わる人が大多数であった。さらに、当時の船は現在の船ほど頑丈かつ安全な造りではなかったので、操業期間の長い遠洋漁業では犠牲者を伴う海難事故が頻発していた。

このようなとき、唐桑では、死者に対する供養もさることながら、この死者が出てしまった浜に対しても、清めるためのお祓いをしなければならないという信仰が根付いてきた。海難事故によって死者が出たとき、その遺体の上がった浜は“穢れた”と認識される。これについて早馬神社の宮司は、「海で人が亡くなって御施餓鬼をすると、これまでに海で命を落としてきた霊も一緒に浜に集まってくる。海は一つしかないから、どこの海で亡くなったのかは関係ない」と話す。つまり犠牲になった人だけではなく、集まってきたかつての海難事故の犠牲者たちによっても浜が穢れしてしまうというのである。そしてこのように穢れてしまった浜を清めるために行われるのが、ウラバライである。前章でも述べたように、浜が穢れた状態とは、いわば非日常の浜である。それを日常の状態に戻すのがウラバライである。

ウラバライを行うにあたって中心となっているのは早馬神社の宮司である。運営組織として動くのは浜ごとの青年会（浜祭り組合）の役員で、これに浜のこれまでの海難事故死にあった遺族やその関係者が加わってお祓いを行う。

ウラバライは唐桑に数百年前から伝わる伝統的な儀礼であることから、今日まで特に漁師たちの



写真1 2011年6月11日（植田今日子撮影）
唐桑町北古館にて東日本大震災の津波後の「浜祓い」

間で受け継がれてきた。浜で不幸があり、浜が穢れている状態にあると、漁師はウラバライを終えるまでは漁には出ることはタブーとされてきた。浜が穢れている状態のまま漁に出してしまうと、不漁や事故といった不吉なことがつづくかもしれないと考えられてきた。いわば唐桑の漁師はそれほど海に対して“畏れ”を持って接してきたといえる。

このように、唐桑では、海に対する“畏れ”を海難事故の度に忘れることがない。このことはウラバライをはじめ1年を通じた地区の伝統行事にみることができる。唐桑の祭祀暦に目を向ければそれは明らかである。

表5は、唐桑での年中行事の中心を担う早馬神社の1年間の祭祀暦を表にしたものである。3月の浦祭をはじめ、9月19日の例大祭、10月の神幸祭などは、浜に対する祭礼である。また、表にある祭礼以外のものとして、唐桑の漁師たちによる、1年の漁が始まる前の春に行われる出初式がある。この祭礼では乗組員が数組に分かれて、早馬神社、御崎神社、賀茂神社の、唐桑内の3つの神社を全て参り、安全祈願や大漁祈願の祈禱を行う。唐桑には、このような、浜にまつわる伝統的な祭礼が多数存在している。唐桑の人々は、浜を敬い、なおかつ畏れを持ち続けてきたことがうかがえる。なかでもウラバライは、非定期的に海難事故や海や浜での死亡といった非常時の度に繰り返されてきた儀礼である。このことをふまえ次項では、日

表5 早馬神社の祭祀暦

月	日	行事
1月(睦月)	1日	歳旦祭
	6日	鳴物開
	7日	八雲神社七草祭
	10日~20日	日籠
	24日	梶原神社祭 氏神祭
2月(如月)	1日~3月彼岸	年守、厄除祈願
3月(弥生)	1日~31日	浦祭
	春分の日	祖霊祭
旧4月(弥生)	15日	八雲神社 例祭
7月(文月)	28日	不動尊神社 例祭
8月(葉月)	14日	祖霊祭
9月(長月)	1日~30日	祖霊祭
	19日	例大祭
10月(神無月)	第1日曜日	神幸祭
旧9月(神無月)	24日	梶原神社祭
11月(霜月)	15日	七五三奉祝祭
12月(師走)	1日~12日	日籠奉斎
	15日~28日	幣束切り日
	31日	大祓、除夜祭 ※浜祓い

常・非日常というキーワードを用いてウラバライが東日本大震災での津波で果たしている役割についてみていくことにする。

2. 日常の中の非日常

先取りしていってしまうとウラバライとはいわば「日常のなかの非日常」である。前項では、穢れている状態の浜を「非日常」、ウラバライによって清められた後の穢れていない状態の浜を「日常」と表現した。しかし同時に唐桑では、ウラバライが行われることそのものが「日常」でありなおかつ「非日常」であるということもできる。唐桑では浜で人が亡くなったとき、ウラバライという行いが必ずなされる。それはウラバライが、当然の作法として繰り返し続けられてきたものだからである。また、住民の間では浜で何らかの不幸があったときには必ず浜を清めなければならないということが“あたりまえ”のことで捉えられている。ウラバライは当然の如く行われてきたのである。

これはつまり、言い換えれば慣習としては“日常”ということになる。しかし一方、ウラバライは定期的な日程で行われるものでは決してない。できることなら一度もやりたくないはずのものである。しかし、不幸があったときには必ず行われなければならないと信じられているのである。このことは言い換えると繰り返し返されてきた“非日常”であるといえる。つまりウラバライとは、ケガレとしての“非日常”が、海と暮らす唐桑の“日常”のなかで継承されてきた儀礼なのである。

このことを踏まえて、前述した震災の際のウラバライについてしてみると、このウラバライが決して“未曾有”と形容される今日の大震災があったから、特別に行われたわけではないことが浮かび上がってくる。このように、以前から日常的に繰り返し行われてきたからこそ、以前と同じように“供養”と“清め”として行われたものなのである。もしもこのウラバライが日常的に行われてきたものでなかったとすれば、今回の震災によるウラバライも存在しえなかった。それは、唐桑において今回の震災の際のウラバライが、“未曾有”の災害であったにもかかわらず、海の死者を供養し、浜を清めるという意味では日常の中のウラバライと何ら変わりがないからである。唐桑では、浜に対する畏れを忘れることなく、日常的にウラバライを行ってきたからこそ、このような未曾有の大震災のときでも、日常と同様に、浜を清め、死者と遺族を慰めることができたのである。

次章ではウラバライの潜在的なもうひとつの役割について考察していく。

IV. 津波・海難事故と唐桑

1. ウラバライの役割

もう一度現代のウラバライがどのような流れで進められるのかについてふまえておけば、唐桑から出漁した漁船が海難事故にあってしまうと、港に帰ってきてから亡くなった人の葬儀が行われる。その後、お寺による「御施餓鬼供養」という供養儀礼が行われ、酒や食べ物、真水が供えられ

る。そして、その船の所属する青年団（ハママツリ組合）によりウラバライが準備され、彼らから依頼を受けた早馬神社の宮司によってウラバライが執り行われるのである。唐桑では、ハマやウラと呼ばれる港ごとに地区が形成されており、全ての漁業者がそれぞれの地区に所属している。そのため、事故のあった船が所属する地区の青年団が主催となり、この行事が執り行われることになっている。また、事故発生からウラバライまでの期間は厳密には場合によって異なる。その時期は早馬神社でウラバライの行われる日程が組まれてはじめて決まるのだが、時にはその日程が早められることもある。なぜなら、既述したようにこの地域では海難事故が起こった浜でそのまま漁を行うのは忌避されているのだが、ウラバライが済むまでは誰も漁に出られなくなってしまうため、時期によっては漁師が早馬神社と相談して日程を早めることもあるからだという。長い間漁に出られないことは、漁業で生活している人びとにとっては一方で大変深刻な問題となる。それは当事者の漁船だけではなく、同じ浜に属する他の漁船の乗組員も同様である。

またウラバライが行われるのは、地元の漁師が事故にあったときに限られていない。実際にこれまで身元のわからない人が唐桑の海で亡くなっているのが発見されたり、どこからか唐桑の浜に遺体が流れ着いたりしたこともあったという。そのような時も、もちろんまずは警察に届けるが、その後はかならずその浜でウラバライを行ってきた。ウラバライは海で人が亡くなった際に行われるものであり、それは地元の人だけが対象となっているのではないからである。つまりウラバライは元々の目的が死者を含んだ海を“なだめる”ためのもので、その対象は個々の死者よりもむしろ多くの死者を呑み込んできた海へと繋がる浜という場所だということがいえるだろう。

ウラバライは穢れることで「非日常」の状態とってしまった浜を清め、再び「日常」の浜へと戻ってきた。また、繰り返しになるがウラバライ

に参加する地域の人びとにとっては、亡くなった人に対する弔いの意味も込められている。つまりウラバライには“清め”と“供養”という二つの顕在化した意味が込められ執り行われてきたのである。

2. 減少するウラバライ

以上に説明してきたとおりウラバライは、唐桑の海で不幸があった際に犠牲者の供養の意味を持つと同時に、穢れた浜を清め「非日常」から「日常」の状態へと戻す役割を担う行事である。この“清め”と“供養”という二つの役割を果たすためにウラバライは必要とされ、現在も変わらず唐桑に受け継がれている。しかしウラバライの役割はそれだけなのだろうか。というのも、実際に唐桑へと足を運びそこに暮らす人びとに話を伺う中で、この地域でも少なからず古くからの儀礼やしきたりから離れつつある生活状況が見受けられたからである。けれど、事実として間違いなくウラバライは現在でも続けられている。しかしウラバライにはこれまで述べてきたような“供養”と“清め”の機能に加えて、これまでとは異なる役割を担いつつある。「非日常」から「日常」へと浜の穢れ“清め”ることや、犠牲となった人の“供養”に次ぐ新たな役割、いわば第三の役割がウラバライを現代にいたるまで継続させている要因ではないか、という仮説をここで検証してみたい。

なぜウラバライには“供養”と“清め”とは異なる意味が込められつつあると考えるに至ったのか、経緯を説明しておきたい。それは、実際に調査地へ足を運び聞きとりを行う中で、住民の祭礼離れが見受けられたからである。もちろん唐桑は今でも数多くの祭礼が継続されており、生活と深く結びついている。だが調査を進めていくと、地域住民はウラバライの役割をそれほど意識していないようであった。彼らは海で不幸があったときにはウラバライは絶対に行うものなのだというのだが、認識としては犠牲者の供養という意味合いで捉えているようであり、“清め”という認識

はあまり共有されていないようであった。またウラバライとは古い言い伝えなのだという声も聞かれた。このように、海を仕事の間としていたり、家を海のすぐ近くに持っていた人びとであっても、ウラバライからはかつてと比べれば遠ざかっているとも解釈できる。この傾向は特に年齢の若い住民を中心に広まっている変化である。とはいえ、現代の生活状況に即して考えれば、これはある意味当然ともいえる変化である。なぜなら、近年ではウラバライが執り行われる頻度自体が著しく減少したからである。昔に比べ現代では使用する船は丈夫になり、漁師もライフジャケットを用いるようになったこともあり、唐桑では漁業者の海難事故死はここ何年も発生していない。自らが儀礼を経験していなければ、それがどのような儀礼なのかを深く理解することも難しくなっているといえるだろう。さらに唐桑では震災以前から地域の高齢化が進んでおり、漁師の間では深刻な後継者不足の問題が横たわっている。そのような状況を背景としてウラバライの“供養”と“清め”の役割の認識は次第に薄まってきたといえよう。もちろん我々の視点から唐桑を見れば、今なお祭礼に対する関心は高く、祭礼と地域住民との距離も近いと感じられる。しかしながら、それでもやはり唐桑の昔と今を比較した際には、少なからずウラバライ離れが進んでいることは否めない。何から離れつつあるのかといえば、穢れてしまった浜を平常の浜に戻すというウラバライの役割の認識である。この認識が現在では少なからず薄れてきているのだが、しかしそれでも今なお浜で事故が起きたり遺体が見つければウラバライが行われないということはない。ではいったいなぜ海難事故死の著しく減少した唐桑でウラバライは途切れることがないのだろうか。現代のウラバライは“供養”と“清め”以外の役割を担っているのではないだろうか。そしてその役割こそが、現在までウラバライを存続させているのではないだろうか。亡くなった人の“供養”する役割と非日常の状態と化した浜を“清め”日常に戻す役割に次ぐ

第三の役割について検証してみたい。

3. ウラバライの第三の役割

ウラバライの第三の役割とはどのようなものなのかを現代の唐桑の人びとの生活から明らかにしていきたい。唐桑の生活とはすでに見てきた通り、多くの人びとにとって活の基盤は漁業関係であり、彼らにとって海は生活の間である。つまり、当然ともいえるがこの地域では海との関わりは切っても切れないものである。このように長い間多くの恵みを唐桑の人びとに与えてきた海であるが、東日本大震災の差異に垣間見せたように時に変貌し、人の命を奪う恐ろしいものでもある。あるいはどこかから遠い場所で亡くなった人の遺体を運び、唐桑の浜に打ち上げることもある。このような事態に、もはや浜は昨日までの浜ではなくなる。何事もなかったかのようにその海で漁を続けることができなくなる。このような振る舞いは、なにも唐桑の人びとの認識にとどまるものではなく、一般的な事象として了解可能だろう。そうだとすればウラバライは儀礼というよりも、むしろ再び浜へと出て行くための“けじめ”として捉えられているきらいがある。“けじめ”とはつまり、不幸な事故が起きて「非日常」の状態となった過去と決別し、事故以前の元の「日常」の状態に戻るための区切りの意味として、ここでは扱っている。再三記述の通り、穢れた浜を清め以前の状態に戻し犠牲となった方の冥福を祈り、再び漁業を開始するための手続きがウラバライなのであり、そのために気持ちに区切りをつける目的により行われる儀礼がウラバライなのである。逆に言うならば、浜と密接な関係を持つこの地域においては、この伝統的な祭礼を行うことによって幸も不幸ももたらす海とつきあってきたといえることができる。

しかしウラバライで留意しなければならないことがある。海がもたらした不幸な過去と決別するということは、過去を消し去ったり忘れてしまうことでは決してないということである。事故が起

きて「非日常」となってしまった浜を「日常」に戻すということは、「非日常」以前のように、これからも同じ浜で同じ生活を送るためである。彼らの過去との決別は、あくまで将来の生活のためのものである。ウラバライでは海で起きてしまった人の死を地域で共有し、そこで生じる喪失感や恐怖感という感情までもを分かち合う。そして、再び同じような事故が起きないことをみんなが願うのである。つまり穢れた過去と決別すると同時に、将来への“備え”と“安全祈願”の意味がこめられている。そして、この将来の唐桑の人びとに向けた教訓ともいえるメッセージを同じ浜に生きる者に伝えることこそがウラバライのもうひとつの重要な役割なのではないだろうか。穢れを祓い“清め”、浜を非日常から日常へと戻すことや、犠牲となった人の“供養”というウラバライの顕在化した役割に加え、同じ浜を共有する将来の住民に向けた“備え”と“安全祈願”の喚起が三つ目の役割といえるのではなからうか。

本報告文の目的は、なぜウラバライは数百年にわたって今日まで唐桑で継承されなければならなかったのかという問いを明らかにすることであった。この問いに対して、未熟な調査から曲がりなりにも答えるとすれば、それはウラバライが海難死者を“供養”し、浜の穢れを“清め”るというふたつの顕在化した役割に加えて、将来の災いに“備え”“安全祈願”するという潜在化した未来志向的な役割を果たしてきたからである。ウラバライを執り行うことで唐桑の人びとは災害の危険性を共有し、海に対する畏れを忘却することのないようにしてきたのである。つまりウラバライには“備え”と“安全祈願”という防災意識の確立の役割を海難事故の著しく現象した今なお果たしつづけているのである。

V. 結語

1. 唐桑の人々とウラバライ

唐桑という地は、古くから海と密接な関わりを持ってきた。ただ地理的に海に面しているという

だけではなく、漁や養殖など実際にその恩恵を受けることで心理的な距離も非常に近いといえるだろう。また、唐桑の人々は海に感謝する一方で、海はとてつもない危険も孕んでいるものだという事も知っている。現に唐桑の人びとは、過去に何度も津波や海難事故に遭遇してきた。そんな危険と隣り合わせの海で暮らす人々が今もそこに生き続ける生活には、ウラバライという伝統行事があった。すでに述べてきたようにウラバライには海で亡くなった魂を鎮める“供養”と同時に穢れた浜を“清める”役割がある。この行事は古くから繰り返されており、これをしなければ漁には出ることができないという漁師たちの信仰によって支えられてきた。ではなぜウラバライは受け継がれ、今なおその姿を変えずに行われてきたのだろうか。

この疑問をに答えるには、ウラバライが海難死者や遺族に対してだけではなく、同じ浜の人びとに何を伝えてきたのかを読み取ることが大切だろう。単純にウラバライの所作だけを見れば、亡くなった魂を鎮め浜を清める行為でしかない。しかし一見素朴に映るこの儀礼は、「今まで海で亡くなった全ての魂」を呼び寄せるという特異な性格を持っている。これが意味するのは海で亡くなった全ての魂を呼び寄せることで、同じ浜で犠牲になってきた人びとの死も遠い過去にはしないで、海でこんなにもたくさんの人の命が奪われてきたという事実を認識させ、海が怖いものであることを忘れさせない役割を果たしているといえるだろう。また同時に、その恐怖が人々の心に深く刻まれることで、もう二度と事故を起こさないようにしようという気持ちが必然的に生まれる。そうすれば、事故を起こさないために何ができるのか策を講じる必要が生じる。この事故を未然に防ごうとする意識、つまりは減災に対する意識の向上の役割をウラバライは担っているということになる。

通常、事前に被害を最小にする、もしくは限りなくゼロに近づけることを防災と呼ぶ。われわれ

の日常生活のなかでも避難訓練がこの一例にあたる。しかし、この一般的な「事前」の防災に対し浜祓いはいわば「事後」の対応となる。前章でも述べたようにウラバライが減災を担っているとすると、唐桑では「事後の減災」という固有の対策が行われていることになる。これは悲劇が生じてから事を施す、いわば「後だし」の防災策のようにも思えるが決してそうではなく、何度も海難事故に見舞われ、今後も必ず見舞われるであろう唐桑にみあった順序なのである。つまり、海難事故に遭う度にかつての海難事故での死者を喚起させ、海がどれだけ恐ろしいものかを浜全体で認識しなおすという対策がとられているのである。海の恐ろしさを身を持って経験し深く記憶に刻みこんでいるからこそ、次はもっと被害を減らすような策が講じられる。この被害を少しでも減らそうとする志向性、つまり減災を生みだしているのがウラバライなのである。海難事故が起きてから行われる「事後」のウラバライは、海のすぐそばに暮らす人びとに海の畏れを忘却させない「事前」の減災装置としても作用する。これは、何度も繰り返しになるが海と密接な関わりを持ち、そのありがたさも怖さも知る唐桑の人びとであるからこそ必要とされてきた行事なのである。

要するに、海への畏れを忘却しないため、そしてその危険から身を守るために生みだされ継承されてきたのがウラバライなのだ。いくら対策を練ろうとも、自然の脅威には逆らえないのが人間である。ではいったい海と上手に付き合っていくにはどうすべきか。被害を皆無にするのは不可能に等しい。それならば少しでも被害を減らすためには何ができるのか。唐桑の人びとの答えのひとつがウラバライを事故の度に行うことであり、またそのように減災意識を強く喚起できることが、今日までウラバライが続けられてきた所以なのだろう。少しでも海難事故の被害を減らすため、つまりは減災意識の向上のためにウラバライはつづけられ、今も唐桑の人々と共にあるのである。

2. まとめ

ウラバライが減災の役割を果たしていると述べたが、それと同時に唐桑の人々は、海への感謝と畏怖との相反する“心意”をウラバライという“行為”に覗かせているのではないだろうか。ウラバライのほかにも、「浜マツリ」や「御参詣」など、海に関する祈願を伴う行事は唐桑にいくつも存在する。これらの行事からもわかるように、唐桑の人々がいかに海を貴いものとしているかを知ることができる。海と長年密接に関わりを持ち、その恩恵と脅威を長い間繰り返し享受してきた唐桑でだからこそ、ウラバライをはじめとする海の伝承は、そこに住む人々が海と上手に付き合っていくために必要不可欠なものとなってきたのではないだろうか。

東日本大震災では唐桑も甚大な被害を被った。報道では“未曾有の被害”と繰り返されたが、唐桑では過去に海難事故と同じようにウラバライが行われた。唐桑の人びとにとって今回の大震災は決して特別なことではなく、今までに何度も経験してきた海の危険さの一部が突出して眼前に巡ってきたということになるのだろう。前述したように、唐桑では海で誰かが亡くなる度に浜祓いを行ってきた。そして、その度に漁や養殖を再開してきた。つまり、事故の度に浜祓いをするのでその都度回復し再生してきたといえるのではないだろうか。今回の大震災も被害こそ大きいが決して例外として経験されているのではなくウラバライの後、少しずつではあるが牡蠣やホタテ、ワカメの養殖などが過去に繰り返されてきたように再開されている。この事実から、ゆっくりではあるが唐桑もまた回復してきているといえるのではないだろうか。

さらにウラバライは回復や再生と同時に、減災の役割も果たしていることを明らかにした。先ほど、ウラバライは感謝と畏怖の気持ちを表象する行為と述べた。この畏怖という気持ちは、海は単にありがたいだけのものではなく、常に危険ももたらすものであると同じ浜の人びとに知らせる役

割を持つ。つまり“海をなめさせない仕組み”となっているのである。ウラバライは海が恵みと同時に災いも与えるものであることを忘却させないことで、結果的に減災の役割を果たしてきた。海難事故の犠牲者が著しく減少した現代において、この役割はかつてよりも大きくなっているといえるだろう。常日頃から海に親しみを持っているからこそ油断してしまうところをウラバライという固有の儀礼を執り行うことで抑止してきたのである。つまりウラバライとは、海への畏怖を喚起して減災策を講じさせ、同時に祓い清めによって海を生業の場に戻し再生の原動力にするという、表裏一体の意味を持った儀礼なのである。数百年にわたって行われ続けてきた理由も、ここに見出すことができる。

私達は気仙沼市唐桑町での調査でウラバライが古くから行われてきた単なる伝統的儀礼というだけでなく、海への感謝と畏怖とが同居し、減災意識を繰り返し喚起する役割をも担った、海と共に暮らす唐桑の人々に必要とされてきた行事であるという結論に達した。全国各地に伝統行事は存在するが、はるか昔から継承され続け今も変わらずに行われているという事実の裏には、そのいずれにもはかり知れない程たくさんの願いが託されているのだろう。唐桑のウラバライには“恵み”と“災い”をもたらず海から離れることのできない人びとの減災の願いが託されている。このような願いが今なおウラバライという儀礼となって姿を現し、受け継がれるに至っている。時代は変わっても切実な願いは大きく変わることはない、それをウラバライは見事に具現しているのではないだろうか。暮らしをとおして託されてきた願いが形作る伝統行事の貴さを、私たちはウラバライに見ることができた。

おわりに

本調査では、東日本大震災で甚大な被害を受けた気仙沼市唐桑町の浦々、浜々で行われているウラバライに焦点をあてて約一年の間調査を進めて

きた。調査地唐桑では、我々の想像の範疇をはるかに超えた過酷な現実が広がっていた。報道では一部の被害の様子と一部の人の声しか聞くことができなかった。しかし実際には津波の傷跡は深く、被害の格差が地域にもたらず問題も少なくなかった。しかしそのような大変な状況にも関わらず、現地の人々には活気があった。何とかもとの状態に戻そうと、近所の人たちと協力して積極的に動いておられた。津波被害に遭い、大変な状況下で快く私たちの調査に応じていただいた方とお話をする時は、時折悲しい表情にも直面せざるをえなかった。改めていかに今回の震災が非情なものであるのかを垣間みたようだった。建物はもちろん、多くの尊い命も一度に奪われた。大きな悲しみをもたらし、大切な思い出を持ち去って行った。調査を進めるごとに、今回の震災がいかに大変なものであったかを、身を持って感じる事ができた。そんななか、笑顔でお話をさせていただいたり、お祭りなどの行事の再開に積極的に尽力されている姿を見て唐桑の人々の強さもまた垣間見た気がした。震災後、海がきれいになったと早馬神社の梶原宮司がおっしゃっていた。そんな海の再生力と同様に、唐桑という土地もそこに住まう人々もまた、必ず立ち直ることができるのだと教えられた。当初は単なる行事としか思えなかったウラバライも、調査を通してどのような役割を持ち、長きにわたって伝えられてきたのか、そして唐桑の人々にとってどれほど重要な行事であるのかを認識することができた。また、唐桑の回復に向かって力を尽くす人々の姿を見て、唐桑の祭礼が必要とされていることも理解した。海と密接な関わりがある唐桑だからこそ、その海と唐桑の人々との関係が良好に続いていくために儀礼や祭礼を怠ることがないのだろう。

今回の調査を通して、海の恐ろしさを認識したと同時に、伝統行事の凄さを知ることができた。単にウラバライがそこに存在しているだけではなく、人々に必要とされながら少しずつ姿を変えて継承される伝統の所以がそこにはあった。

同様に、大なり小なり全国には伝統行事が存在する。きっとその一つ一つにもウラバライと同じように深い物語が存在するはずである。そのどれにも、そこにしかない願いが託されているのだろう。ただお祭りを見るだけではなく、そこに託された人々の願いを読み取ろうとすることで、伝統行事を今までとは違った角度から見る事が可能になるかもしれない。

唐桑の人々はウラバライという伝統行事を大切に伝えてきた。そして、何度海難事故に遭遇しようとも、唐桑から去ろうとはしなかった。このことから彼らは唐桑の海を愛し、唐桑の地に誇りを持っていることが確信できる。人が伝統とともに生きるのは何故か、今回の調査で確認することができた。

謝辞

初めて唐桑を訪れてから、長い時間が経過しました。唐桑のみなさまからすれば部外者である私達をあたたかく迎え入れてくださいました。ありがとうございました。調査に不慣れな私達がここまで報告書をつくりあげることができたのは、みなさまのご協力あってこそです。素人の学生ゆえに至らない点多々あり、不快な思いやご迷惑をおかけしてしまったこともあったかと思えます。それにも関わらず最後までお話をしていただいたり、笑顔で接していただいたり、わざわざ時間をとって何度も何度も質問にお答えいただき、感謝してもしきれません。ありがとうございました。簡単ではありますが、この報告書をもって感謝の意を表したいと思えます。

最後になりましたが、今回の東日本大震災で被害にあわれた方々に対しご冥福をお祈りいたします。一日でも早い復興を、班員一同心よりお祈り申し上げます。

この報告は「平成23年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『地域脆弱性の認知と持続基盤形成を促す大学・地域協働拠点の構築』」の予算に基づく成果の一部である。

参考文献

唐桑町史編纂委員会（1968）『唐桑町史』
唐桑町海の殉難者慰霊碑保存会（2006）『涛哭の海—
創立四十周年記念誌』阿部印刷。
「河北新報」2012年6月26日朝刊

参照URL

気仙沼市役所 (<http://www.city.kesenuma.lg.jp/>)
本吉唐桑商工会 (http://www.rias.miyagi-fsci.or.jp/kk/a_map.html, <http://www.rias.miyagi-fsci.or.jp/kk/mind/history.html>)
三陸特選市場（宮城県漁業協同組合唐桑支所）
(<http://www.sanrikutokusen.jp/>)
早馬神社 (<http://hayama.jinja.jp/index.html>)
唐桑半島被災情報 (<http://karakuwanow.com/info.html>)
宮城県長寿社会政策課 (<http://www.pref.miyagi.jp/chouju/toukei/21sityousonnbetu.pdf>)